ドキュメンタリ映像制作の授業実践（中学校）

広島大学附属三原中学校教諭　大和浩子　簑島　隆　林　裕美　藤井志保
広島大学大学院教育学研究科　山本　透
e-mail:yamato@hiroshima-u.ac.jp

１．はじめに

本校のマルチメディア学習の目標は「情報の批判的判断力」と「情報の科学的な理解」の育成であり，本単元は前者の育成を主眼とする。カメラの前に展開するシナリオのない「ノンフィクション映像」でも，それらを制作者のある意図に沿ってつなぎ合わせることにより，明確な意図を含んだ情報となる。我々はその映像情報を「ドキュメンタリ」として日常的に受け取っている。本単元ではまず「ドキュメンタリ」とは何かという概念を学ぶ。その後実際にドキュメンタリ作品を制作することにより，編集の工夫や演出によって視聴者の受け取る情報が制作者の意図に沿っていくという事実を体験的に学習できる。この体験的学習は映像情報の読み方や，それをふまえて情報を吟味し取捨選択する力につながると考える。

今回の単元ではまず，ドキュメンタリ系のテレビ映像制作を手がけているプロの方をゲストティーチャーとして招き「ドキュメンタリには意図が隠されている」ということを本単元の基本概念として語ってもらう。そしてそのことを実践的に学習する手だてとして，同じ素材の映像を使いながらグループごとに違うテーマでドキュメンタリ作品を編集させていく。その後，出来上がった作品を相互に鑑賞し評価する活動を通して，素材映像は同じでも編集後に視聴者側のもつ感情や印象はそれぞれ違うという事実を体験的に学ばせていく。さらに実際にテレビ放映されているドキュメンタリ番組の映像技法や番組構成等を分析する活動を通して，日常的に接している映像情報の「制作者の意図を視聴者に伝える」ための工夫について気付かせる。このことにより，日頃目にする映像情報に関して批判的・分析的な視点を新しく持つことが出来ると考える。

２．目標

・ドキュメンタリ映像制作について，実践を通して技法を身につける。
・映像は制作者の一定の意図に基づいて作られており，必ずしも真実とは一致しないという視点を実践を通して養う。
・映像情報の読み方を身につけようとし，それをふまえて情報を吟味し取捨選択しようとする態度を養う。

３．単元構成と実践内容

第１次：ドキュメンタリとは何か――――１時間
◇教材：あらかじめ宿題として出されていた「担任の先生を観察しようシート」
◇ゲストティーチャー：(株)ＴＢＳビジョンより　海老沢プロデューサー，田中ディレクター，高橋ディレクター
◇概要：授業実施の前日に「担任の先生の表情、言葉などから『気持ちを推測』し、行動と合わせて具体的に書き出そう」という取り組みをしておき，そのメモを元にゲストティーチャーが生徒たちにインタビューするという形式で学習を進めた。表面的な事実と真実は違うこと，いかに制作者側が伝えたいと思う真実を映像として伝えるか（事実を映像として切り取るか）が重要だということなどを，テレビ番組制作の現場の話題も交えながら聞かせてもらった。

第２次：ドキュメンタリ映像をつくろう―――１４時間
・課題提示とテーマ設定，グルーピング―――１時間
・構想表制作と素材映像の確認――――――５時間
・編集――――――――――――――――４時間
・クラス内中間発表と改善点の検討――――２時間
・学年での映像コンクール――――――――２時間
◇概要：総合的な学習の時間や特別活動の時間に記録映像として自分たち自身が撮影してきたビデオを，一定のテーマに沿って５分以内のドキュメンタリ作品に編集する。素材映像は，昨年度３月に実施された沖縄への修学旅行で実行委員６名がＤＶカメラで撮影した「旅行の様子の映像」約１５０分と，本年度４月末から７月１日にかけて取り組んできた文化祭での総合表現活動「ハイパーエイサー・琉球魂」の練習や本番の様子の映像約４５０分とする。全員に自分が表したいテーマを考えさせ，同じテーマを希望している者同士を２～３人１組のグループとした。編集はＰＣによるノンリニア編集で行う。膨大な素材映像の中から自分たちの考えたテーマを表すために必要なカットを探し，つなぎ方を工夫し，さらに音楽やナレーション，テロップなども考えて作品として仕上げる。まとめとしてクラス内の相互評価でノミネート作品を選出，それらでコンクールを実施し（審査員は校内の一般教員）評価した。
◇授業の実際
テーマを考えた時点で，修学旅行映像を選択した者とエイサー映像を選択した者の割合がほぼ７：３となった。細かいテーマ設定では，修学旅行に関しては「沖縄の自然の素晴らしさを伝える」「修学旅行の楽しさを伝える」「３日間の旅行を日を追って旅行記風にまとめる」などが多かった。エイサーでは「本番の発表に絞ってその緊張感を伝える」「本番までの苦労した道のりと本番での感動を伝える」「太鼓チームのドキュメント」「大道具チームのドキュメント」などが出た。それらのテーマに沿って大まかな構成を絵コンテ風の表にし，素材映像を実際に見て取捨選択・確認しながら構成表を適宜修正していった。
素材映像は，修学旅行映像については編集ソフトを導入している生徒用ＰＣのハードディスクにＡＶＩファイルの状態で同じ物をコピーしたが，エイサー映像は量が多いためＤＶテープのままのものをカメラで早送り再生して確認させた。ともに膨大な量であるため，必要なカットを探す確認作業でかなりの時間を費やした。しかし後の編集作業はいってみれば一種の「映像工作」であり，この必要なカットを選ぶ作業こそが意図を伝える作品作りでは最重要と考えじっくりととりくませた。構成表の

変更は順次赤のボールペンで訂正させることにし，変更の軌跡がよく分かるように工夫した。
おおまかな素材選択が決まったグループから編集・音入れに移り，グループによっては説明のナレーションやテロップを入れる段階まで進んだところもあった。ＢＧＭについては市販の著作権フリーの音楽集から選ばせた。中間発表会ではその班のテーマを先に発表したあとで映像を全員で鑑賞し，「気付いた工夫」と「もっとこうしたらいいというアドバイス」を交流し，最後に制作者側からのコメント，というパターンを採った。その後「テーマ性・完成度・個性」の３観点からノミネート作品を投票し１クラスから５本のコンクール出品作品を絞った。学年全体でのコンクール形式発表会も同じ３観点で授業担当以外の教員に採点してもらい，優秀作品４本を表彰した。

第３次：ドキュメンタリ番組を分析しよう―――２時間
◇教材：ＮＨＫビデオ「プロジェクトＸ」より『ツッパリ生徒と泣き虫先生～伏見工業ラグビー部・日本一への挑戦～ 』
◇概要：実際にテレビ放映されているドキュメンタリ番組を構成・映像の特徴・音楽などに注目して分析的に見ることで,自分たちがドキュメンタリづくりにおいて「伝える」ためにした工夫との共通点や相違点に気付き，映像情報はドキュメンタリにおいても制作者の意図によって事実を再構成したものであることを理解する。
◇授業の実際
プロの作品を最初から分析的に見ることは難しいと判断し，まず一度全員で教材のドキュメンタリ番組のビデオを鑑賞した。高校生と教師の話のせいか子どもたちは素直に見入り，感動した。その後，これまでの学習をもとに「プロジェクトＸを構成する要素」を子どもの中から出させた。その結果「ナレーション・音楽や効果音・再現映像・古い映像・現在の映像・インタビュー映像・スタジオでの映像・司会者・ゲスト・オープニングやエンディング」の１０点が挙げられた。これらの点について全員で要素を分担して前時に見た番組をもう一度分析的に見ることとした。分析後，各要素の分析者から気付きを交流し，それぞれの要素が「感動」という番組全体のテーマを増幅させるために工夫して使われていることに気付かせていった。また，教師の側からはその工夫の中でイメージ映像やナレーションの効果により，使われた映像をそのまま事実として信じかけてしまう経験をについて補足し，これまでの学習を通しての振り返りを書かせた。

４．生徒の振り返りの分析

主に意欲面についてアンケート形式で事後調査を行った。また、自由記述で昨年からの学習を通しての感想と反省を求めた。

◇この学習に関する意欲はどうだったか。

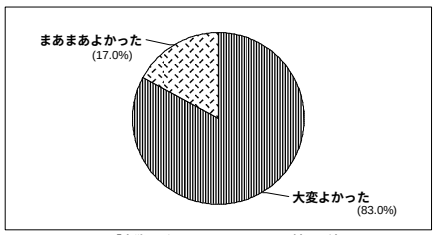

図１「意欲はどうだったか」の問いに対する結果

８割以上の生徒が「大変良かった」と回答しており，また「意欲があまりない」「大変良くない」と答えた生徒は居なかった。１次～３次の活動を楽しんで行っていた様子がうかがえる。

◇学習を通して新しい発見があったか。

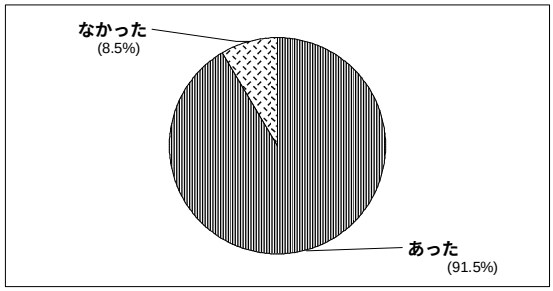

図２「新しい発見はあったか」の問いに対する結果

◇テレビなどの映像を見る目が変わったと思うか。

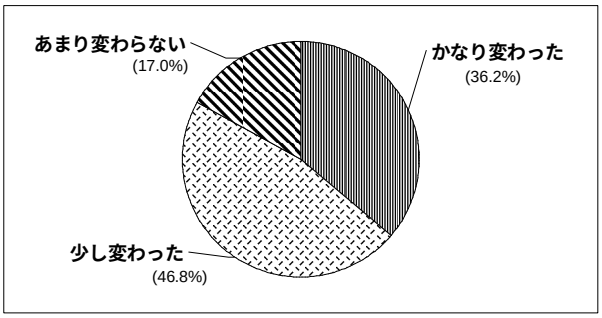

図３「ＴＶを見る目は変わったか」の問いに対する答え

８割以上の生徒が変化を感じている。「あまり変わらない」と答えた生徒が２割弱で,「ほとんど変わらない」は居なかった。

◇感想と反省（生徒の原文まま）
・最初は「やっても意味がない」「意味不明な授業」といった言葉が会話の中に出てきていたのですが，今はそんなことを言う人がこの学年の中に１人も居なくなったように思います。正直，最初は僕も「何でこんな授業をやるのかな」なんて思ったりしていましたが，今では情報社会をこれから生きていく上での大きな糧になったと思います。余計なことかもしれませんが，こういう授業を受けてない人はこの先どうなってしまうのだろうと思ってしまうくらいです。僕はこれから，「情報」に気をつけて生きていきたいです。
・映像というのは，いくつかの短い映像たちを組み合わせて作っているので，とにかく「つなぎ」が難しいと思った。「こんな映像にしよう」「こんなことを伝えたい」というのは，制作側だけが分かっていればよいのではなくて，絶対に相手がいるから，どうにかして伝えなくちゃいけない。ならばこんな順番にして，暗転を入れて，音楽はこうして…など，見ている側には分からない影の努力がある。私は，そんな努力を見つけられる人になりたいです。
・映像というものは自分の思いを伝えやすいものなのだと思った。文字を入れたりることで，人に何かを思い込ませることが出来るのだ。映像の使用にはかなり気をつけないといけない。簡単に何でも信じてしまう。マスメディアにも注意を払えるようにならなければならない。

よくテレビでやっている「報道被害」というものがどういうことか分かった気がした。
・みんなそれぞれ使う素材は同じなのに，出来上がると全く違っていてすごく楽しかったし面白かった。私には出来ないような編集をしている班もあって，かっこいいなぁと思ったし，個性が出ていて発表会も全然飽きなかった。やり始めた当初は「絶対私には無理」と思っていたが，班の人や周りの人のおかげで自分でも納得できて見てもらう人にも楽しんでもらえる映像が出来ました。まだまだやりたいなぁ。
・自分で言うのも何だけど，本当に私たちはこの勉強を始めてから「映像」について成長したと思います。だから映画やドラマを見ても「どうやってこの場面を撮っているのだろう？」ときっとみんな１回は思ったことがあるのでは。最初手ぶれが多かったビデオ撮影もものすごく成長したと思います。「プロジェクトＸ」の鑑賞もあんなに細かく分析して見るなんてないと思います。私たちの映像を見る目が昔より変わったのは確かです。これを生かして，周りをよく見る人になりたいと思います。
・２年の時のショートストーリーを作る授業でドラマなどの見方が変わり，今度はドキュメンタリを作ることでこうすれば見やすくなるとか,見る人を引き付けるとか,そういうものの仕組みやワザを学んだ気がします。私にとってテレビは身近なものではあるけれど「自分が達が作る」ということには違和感がありました。しかし作っているうちに，楽しいし，いろんな発見がありました。ＴＶ業界の人はいつもこんな感じで作っているのかなとか，こういう仕事も面白そうだな，と思いました。見る者の側に立って物事を考えるのは難しくて大変なことだけれど，それが出来るようになることで，相手のことを考えられる人間になれるんじゃないかと思います。楽しかったです。

５．今後の展望

5.1 本単元の目標の達成について

・ドキュメンタリ映像制作について，実践を通して技法を身につける。

本来ならば撮影の段階から全て自分たちで制作するのがベストであろうが，ドキュメンタリ制作の経験が全くない子どもたちにそれが可能かどうかは大変難しい問題であった。本単元のメディアリテラシー的目標は「映像情報の再構成性に気付かせる」ということであり，それが達成されるのであれば「撮影」の活動を「必要な映像を選ぶ」という活動に置き換えても効果は変わらないと判断した。撮影を楽しみにしていた生徒も確かにいたが，素材となった映像群が全て自分たちの活動を記録した物であり登場する人物も場面も全てよく見知った物であることから，子どもたちは「映像を選ぶ」という活動を大変楽しんでいた。そのためか撮影が出来なかったという不満は感想からは見られなかった。

昨年度に経験したミニドラマの制作を通して，子どもたちは一定程度の「作者の思惑」を映像として表現することの技術は身につけている。例えば「楽しさ」を表現するために必要な映像は何か，それには被写体の「楽しそうな様子がよく分かる映像」や「映像の中で流れる生の音声」が必要なことを理解している。自分たちの設定したテーマに沿って素材を選び，そのテーマをさらに補強するための映像の切り方や繋ぎ方，音楽，ナレーション，文字情報，効果音など，子どもたちは少し出来上がった映像をその度にくり返し見直しては修正するという試行錯誤をしながら完成へと歩を進めていた。

必ずしも当初意図していたテーマと沿わず，素材映像そのものの面白さやインパクトに引きずられて編集された作品や映像工作に偏った作品も見られたが，相互評価の場面で「その映像はテーマにそぐわない」等のシビアな評価が子どもたち同士でなされており，映像を読む力が徐々にではあるが育っていると実感した。

・映像は制作者の一定の意図に基づいて作られており，必ずしも真実とは一致しないという視点を実践を通して養う。

昨年度のフィクション制作の授業後アンケートではちょうど５割の子どもが「テレビなど映像の見方が前より変わった」と答えた。結果としてドラマを見る目は変わってもそれ以外の映像情報への接し方の顕著な変化は見られず，子どもたちの意識は「映像を読み解くスキルとして映像のツクリを知った」という段階にとどまっているという結果であった。

それを踏まえ「メディアを学習して情報との向き合い方が変わった」となっていくよう、新たな題材開発を試みていく必要があるとの思いから今回の単元を試みたが，結果として８割強の子どもが「テレビなど映像の見方が前より変わった」と答えた。（図４）

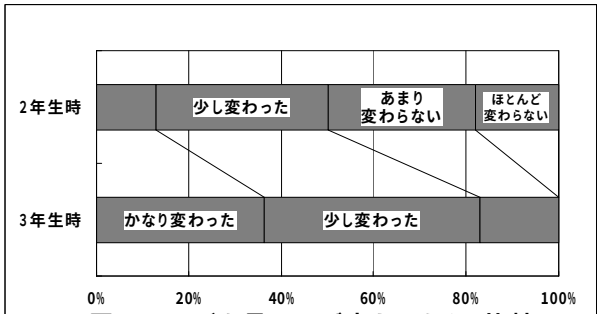

図４　テレビを見る目が変わったか･比較

また８割強の子どもが「学習を通して新しい発見があった」と答えており，その内容を自由記述で求めると「例えば『感動させよう』とか，意図を持って映像を編集するにはすごい工夫が必要なこと」などの実際に作品を作る体験に照らして書かれたものが多かった。発表会に触れたものでは受信者の立場で「同じ素材映像でも全く違う印象の作品になっていることに気付いた」という記述が最も多く，さらに「音楽や繋ぎ方やナレーションの中味とかで，見ている者の感情がある程度コントロール出来る」「事実と違うこともそれらしく伝わる」等の記述も見られた。全員が達成したとは言えないが，ある程度目標に近づけたのではないかと感じている。

・映像情報の読み方を身につけようとし，それをふまえて情報を吟味し取捨選択しようとする態度を養う。

この目標については印象でしか記述出来ないが，自由記述の振り返りや日頃の授業への取り組みの様子などから大まかに判断して,まだ不十分であるととらえている。確かに映像情報の読み方については漫然と情報を受け取るという立場から大きく前進して「こういうことを言おうとしているのだな」と推測しながら見る態度を持つこ

とが出来るようになった。しかしいざドキュメンタリを作るとなったとき，子どもたちの一部は，映像を取捨選択する規準がいくつかあるうち「面白いか，面白くないか」という規準に流された。「これで意図した情報が伝わるか，伝わらないか」ではなく「笑えるか笑えないか」という情報伝達性とは違う方向を志向したのである。もちろん「笑わせよう」という「意図」で編集を行うのであれば（その笑いの質が問題ではあるが）それはそれで課題に適っていると言えようが，最初に掲げたテーマを放棄して「笑える映像」を得た瞬間それを作品の中に使うことが大前提になってしまったグループがあったことは事実である。

情報を取捨選択する際には必ず選択の規準が必要となる。安易な笑いを追ったり，内輪だけで分かる狭い範囲の情報で満足したりすることのないよう，今後とも内容・方法ともに考え続けていかねばならない。

5.2 指導の手だてについて

◇オーディアンス意識の明確化

鈴木みどりは日本版メディア・リテラシーの「８つの基本概念」の中で，３番目に「オーディアンスがメディアを解釈し、意味をつくりだす。」という項を掲げている。情報は受信者こそが意味を創り出すという重要な視点であるが，これまでの取り組みで私たちはこの視点を強調してこなかった。つまり，情報の発信に際してはオーディアンス（受信者）を強く意識すること，という視点について座学でも実習の中でもあまり問題にしてこなかったのである。

今回のドキュメンタリ編集では，学習のスタート時に「海外の交流校に送って，自分たちの学校の様子が伝わるように作ろう」とは呼びかけていたのだが，次第にその意識は薄れ，完成作品の中には「一緒に旅行に行った人やエイサーに取り組んだ人でないと分からない」編集の仕方をしてあるものが少なくなかった。中間発表会のアドバイス交換で「初めて見た人には意味が分からないのでは」という鋭い意見も出てはいたが，全員がそういう視点を得るには至っていない。

誰に対して発信しているのかという意識を常に持たせることは，大変重要である。不特定多数なのか，特定の誰かなのか，それによって情報の取捨選択規準が随分変わって来るからだ。この視点を持つことは情報リテラシー能力を向上させると考える。今後それも視野に入れた題材開発を試みたい。

◇学習動機

昨年度メディアの学習を始めた当初は，子どもたちは「なぜメディアの勉強をしなくてはならないのか」が分かっていなかったため、学習意欲はかなり低かった。実習を伴う映像作りに入ってからは「面白い」と感じ始めたようだが、この「学習動機」の形成は本研究において大きな課題であった。

２年間の学習を終えて初めて，前掲の振り返りのように「今では情報社会をこれから生きていく上での大きな糧になったと思う。」「見る者の側に立って物事を考えるのは難しくて大変なことだが，それが出来るようになることで相手のことを考えられる人間になれると思う。」など，メディアリテラシーの基本原則にかなり近い感想が出てくるようになった。今後もこの学習動機形成については継続課題として取り組みたい。基本的には「楽しい」と思える活動を仕組むことだと現在は感じているが，同時に「この学習をしたら，こういうメリットがある」ということをいかに初期の段階で意識させるかがキーポイントとなろう。既存の教科にも「何故この教科を勉強しなくてはならないのか」という学習動機の形成については様々なアプローチがあると思う。今後もそれらを参考にしながら子どもの学習意欲を高めモチベーションを維持させていくような指導方法の確立について考えていきたい。

5.3 到達目標の設定と題材配列について

「中学生としてここまでは身につけておきたいメディアリテラシー」について、昨年度からの取り組みをもとに検討をしている。義務教育の出口としての中学３年生ではあるが、現実にはほとんどの子どもたちが高等学校に進学する中で、より専門的な「情報」の教育が彼らを待っている。義務教育で培うべき情報リテラシーと高等学校で引き継がれるそれの間には密接な関係があり、連携が必要であると考える。

その中で，「先にフィクション，それを終えてからノンフィクション」という配列で題材を扱ってきたことについて疑問を感じ始めている。映像を文章に例えれば，フィクション（ドラマなど）は国語でいう「文学的文章」であり，ノンフィクション（ドキュメンタリなど）は「説明的文章」であると言えよう。国語科で「１年生は詩や小説」「２年生は説明文」などのように文学的教材と説明文的教材を学年で分けるというようなカリキュラムは採っていない。当然２つの種類の「文章」は並列のカテゴリであり，どちらかが理解しやすくどちらかが難しいなどないのではないだろうか。私たちは「映像の作り方としてはフィクションを作る方が理解しやすいだろう」と考えて題材を配列したのだが，本当にこの配列が効果的であるのか，つけたい力と照らし合わせながら再検討をしなければならないと考えている。

もちろん幼小中連携カリキュラムの中での位置付けや，高等学校での内容との連携の視点も欠かせない。今後の課題は多く，整理しながら取り組んで行かなくてはならないと実感している。

参考文献・資料

[1]日本映画・テレビ編集協会編　『図解映像編集の秘訣―映画とテレビ番組、コマーシャルから学ぶ映像テクニックのすべて』玄光社MOOK (11)　(1999)
[2]碓井 広義 著　『テレビの教科書―ビジネス構造から制作現場まで』 PHP新書 (2003)
[3]ＷＥＢサイト　「メディア・リテラシーの世界」 http://www.mlpj.org/
[4]渡辺みどり 著　『テレビ・ドキュメンタリーの現場から』　講談社　(2000)